

理事長所感（2月）

2月は、新元号「令和」の原典となった「時に、初春の令月にして気淑く風和ぐ」（万葉集巻5）の令月（佳い月）です。

もともと、当時は太陰暦で、現代の太陽暦とで30日～40日程度のズレがあるので、現代に直すと3月中旬～4月初旬となります。

丁度、冬の厳しい寒さ、深い積雪の時期が過ぎ、「空気も緩やかに淑くなり、春めくように風も和らぐなど春の訪れを感じさせる、将に「初春の佳い月」なのです。

ところが、今年は地球温暖化の影響で暖冬が続き、スキー場で雪が少ない、雪合戦の会場で雪の球が作れない、白菜などの鍋物の材料が売れない、コンビニのおでんの売れ行きが悪い…など各方面にさまざまな問題を投げかけています。

この地球温暖化の影響で、従来あり得なかった被害が各地で発生しています。

一昨年、ゲリラ豪雨により、『晴れの国』と呼ばれて水害とは縁の薄かった岡山県倉敷市真備町や従来降水量が少なかった南予の宇和島市吉田町に大きな被害が発生しました。

また、昨年は台風15号、19号と大型で強力な台風が短期間に続け様に関東甲信越地方に襲来しました。これも地球温暖化の影響で、海水が深い所まで熱くなっているため、大型で強力な台風が海水をかきまわして通過しても、海表面の温度は高いままなので、次に発生した台風も、高い海水温によって強力な大型なものへと成長するからです。

このように、従来と異なる気候変動から、わが国は大丈夫なのかと将来を懸念する論調も増えています。

気候変動について、名君として名高い湯王の『湯王の祭文』という有名な故事があります。

気候変動でひでりが続いた際、自らの政治に対する天の怒りが気候変動の原因ではないかと恐れ、『政、節あらざるか。民、職を失えるか。宮室崇きか（政治に節度がないからであろうか、民に職がないからであろうか、宮殿が立派すぎるからであろうか）…』など政治に対する自省の言葉を『祭文』にして、天の神にささげたという話が残っています。

当時は、気候変動が直接穀物などの生育に影響していましたから、為政者が気候変動に敏感になるのは当然ですが、逆に現代の為政者は少し気候変動に鈍感すぎるように思われます。

代わって頑張っているのがNPO法人などの地域コミュニティで、「ゴミゼロへの取り組み」、「百年の森づくり」への取り組みなどで、少しでも地球温暖化へ対処しようとしています。

当協会は「協働」について調査研究していますが、地域コミュニティのこうした活動についても順次紹介していきたいと考えています。

理事長 平谷 英明